

花の歌

歳時記

前田康子

祖父の庭にあったブリキの如雨露じょうろを思い出す事がある。しっかりとまたないと重くて水をこぼしそうになる。水の出方がやさしい如雨露で、水撒まきしながら手にかけて遊んだ。

私わたしが大きくなるに従って、だんだん祖父の庭は荒れていった。祖父は寝たまま一日を過すごす事が多くなり、だれも庭の手入れをすることがなくなつた。

つくつく法師が鳴き、晩夏の夕暮れの日差しがきつく、高校野球のテレビがつけ放しになっている。祖父は眠り続けていた。縁側に足を垂らしながら、祖父は死んでしまったのではないかと不安になることがあつた。そうと寝息を聞いてみるとかすかに聞こえた。

仏壇の線香の匂におい、庭の杉の木を渡る風、たくさんの蟬せみの抜け殻。夏休みは何をしたというわけでもないのに、終わる頃には寂しい気持ちになる。きっと誰もだれもが。



萱草

土手の斜面にいくつもヤブカンゾウが咲いている。日差しが強さに焼けたような花の色。縮れたような花びら。遠くから見てもすぐわかる盛夏の野の花である。朝に咲き夕暮れにはしぼんでしまう一日花としても知られている。

草にゐて鳴く鳥多し萱草の花照る遠きな
だりにも鳴く

佐藤佐太郎「開冬」

草の中に寝転がって鳥の声を聞いているようなおらかな調べである。昭和四十六年、佐太郎六十二歳、北海道礼文島に遊んだときのうた。

萱草の花には一重咲きのノカンゾウと八重咲きのヤブカンゾウがある。別名、忘れ草といわれているのはヤブカンゾウの方である。中国ではこの花を見て憂いを忘れたところからそう呼ばれた。

それとなく紅き花みな友にゆづりそむき
て泣きて忘れ草つむ

山川登美子「山川登美子歌集」

登美子の代表歌のひとつといわれているうた。友とは与謝野晶子。紅き花は恋？ いやもつとほかの何か？ 忘れ草を摘んで悲しみを忘れようとしたが、その憂いは決してきえることのないまま、登美子は短い生涯を終えた。

萱草の小さき萌を見てをれば胸のあたりがうれしくなりぬ

斎藤茂吉「赤光」

萱草は、春に土から出る若芽を摘んで食べることから、萌え出た芽をうたにしたものも多い。読者も一緒に、嬉しくなるような茂吉の素直な喜びよう。茂吉は多く萱草のうたをつくっているが、童心にかえったような下句が印象的な一首。

萱草
かんぞう





蚊帳釣草

初めて植物をスケッチしたのは小学生の頃だったが、その一枚はカヤツリグサであった。見れば見るほど不思議な形の草。目立たない花を付け、どこにでも生えている。茎を両端から裂き、蚊帳をつつたような四角を作って

遊んだ事からこの名があるという。私の世代では蚊帳すらも、もう見なくなった。名前からすでにレトロな草である。

暑き日はこちたき草をいとはしみ蚊帳釣草を活けてみにけり

長塚 節 （俳句） 長塚節歌集

節は療養中で、暑さのあまり眠れない事もしばしばあった。植物を眺めることと、うたを詠む事だけが唯一の慰めであった。カヤツリグサは抜くの結構力のいる草で、指が痛くなるほどである。節にはこの草を抜くほどの力がまだあったのだ。暑い日は派手な花は避けて、すずしいカヤツリグサを活けてみた。白く、寂しい病室の隅に。

白露の朝々しげきくさむらに蚊帳吊草の穂がすいと立つ

岡 麓 （俳句） 涌井

もう秋の気配を感じ始めた頃、えのころ草や、めひしばなどに混じって草むらにカヤツリグサが立っている。雑草といっても、露がつききらきらとすると、うっとり眺めていたい風情に変わる。

煙などいぶせくたてるふるさとかやつりぐさしなぐはしきかな

大隈言道 （俳句） 松下集

「なぐはしき」は名がうるわしいことだという形容詞。「なぐはしき」という古語がかやつりぐさという名で引き立つ一首。

蚊帳釣草





きょうちくとう
夾竹桃

夾竹桃

盛夏の木の花は毒を持ったものが多く、
凌霄花、夾竹桃もその類である。凌霄花は香
りを嗅ぐと脳に支障をきたすという説があり、
その毒々しい花の色からそうおもわれている
のだろうか。あまり根拠のない説らしい。

夾竹桃が有毒植物であると、今回、凶鑑を
見て新たに知った。夾竹桃は強い木なので生
け垣や高速道路の分離帯に使われたりする。
車道に面して植えられるから、排気ガスで汚
れた感じがなんとなくこの花にはある。

肉のうちに恋はじまるとわれをかすめ夾
竹桃を嗅ぎまはる犬

林 和清 木に縁りて魚を求めよ

不思議なうたである。恋愛の肉体性と、夾
竹桃の匂いを嗅ぎまわっている犬の姿が、意

識のどこかで交差する。

幾本もバスに見て過ぐ根もとより幹の分
かるる夾竹桃を

花山多佳子「空合」

夾竹桃は壁のように、どっと咲いているか
ら、どこからが一本ずつなのか注意して見る
事がない。この作者はあるときふっと根元か
ら幹が分かれているのを発見した。

夾竹桃が咲いている駅があった。電車を待
っている間、背後にざわっと咲いている花が、
自分の生気を吸ってしまうような気がした。
貧血気味の、風のぴたつとやんだ夏の夕暮れ
の事だった。

晩夏のひかり静かなるころながかりし夾
竹桃の花もをほりぬ

上田三四二「黙契」

晩夏のひかりは、人を黙らせる。にぎやか
だった夏の出来事のひとつひとつを、かみし
めるように晩夏はやってくる。夾竹桃の花が
終わりに近づく頃、夕暮れの空の色も、風の
吹き方も変わってくる。ひとびとは我に返っ
たように一人に戻って行く。

まえだ・やすこ「塔」会員